

艦隊これくしょん～呉鎮守府の日常～

猫フランお嬢様

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

海上自衛隊第4護衛隊群第4護衛隊、ヘリコプター搭載護衛艦「かが」で、SH60K哨戒ヘリコプターのパイロットを務めていた主人公は呉鎮守府への転属を命じられ着任した艦隊で深海棲艦との戦いにおける指揮を執りつつ、艦隊の仲間との親睦を深めていく艦娘とのラブコメ的日常を描いていきます。  
投稿主の願望も若干有りw

## 目次

提督と長門の関係

イージス艦が流行です！

呉鎮守府釣り大会！開幕？

珍！コンテナ船救出作戦です！

江風の誕生日大作戦です

22 12 9 4 1

## 提督と長門の関係

時刻は、深夜を少し過ぎた頃

電気の消された執務室で、白色の制服を着た男性がパソコンと見つめ合っていた。

彼の名前は海崎隆盛（かいざきりゅうせい）呉鎮守府に所属する提督である。

海崎は海上自衛隊第4護衛隊群第4護衛隊、ヘリコプター搭載護衛艦「かが」

で、SH60K哨戒ヘリコプターのパイロットとして勤めていた2等海尉で

護衛艦「かが」の大きな特徴とも言える、全通甲板から発艦し、人員、物資の輸送や、哨戒任務をこなし日々

日本の安全を守っていた。

さて、そんな海崎は、護衛艦「かが」での職務から離れ、呉鎮守府という所で、提督業務に勤しんでいる。

日々、艦娘（かんむす）と呼ばれる少女達の指揮を執り、士気を上げ、また彼らの安全を守るというのが

業務内容なのだが、呉鎮守府に所属する艦娘は皆個性的な子が多く、

活気溢れる、職場だつた。

海崎「もうこんな時間か、、、はあ、報告書もまだこんなに汗、こんなじや、時間がいくらあつても足らない！、」

海崎は、そう嘆くと髪の毛を搔き鳩巣、ノートパソコンの画面を睨みつけた。

先日実に十数ヶ月ぶりともなる大規模作戦を敢行し、見事勝利した呉鎮守府。

勝利という歓喜に、艦娘達は、料理に酒にとドンちゃん騒ぎの中、海崎は、防衛省に上げる、報告書を作成していた。

海崎「最終戦闘結果報告、、、えーと敵棲艦、撃沈に至らなかつた艦艇多数いるものの、大元はほぼ撃破、、我が艦隊の損害軽微つと、終

わつたあ♪

4時間続けていた文章化の作業が終わり、一段楽した海崎は背を伸ばすと、椅子から立ち上がり窓の外に広がる夜空を見上げた。しばらく夜空を見つめていると、ノックされる音が鳴り、ドアが開いた。

開いたドアから顔を出したのは、戦艦長門だつた。

黒髪長髪で、凜とした顔つきの長門は、海崎が提督として赴任して以来作戦の立案など、あらゆる行動を

共にしてきた、呉鎮守府の重鎮であり、秘書艦である。

長門「なんだ、提督まだ起きていたのか」

海崎「ん？、うん、報告書の書く量が多くてね汗」

引きつったような笑みを浮かべ、印刷機から出てきた報告書を纏め、封筒に入れた。

長門「そうちか、あまり無理はするな、体を壊してしまつては元も子もないからな」

長門は心配そうな表情を浮かべつつも、海崎の肩をポンツとする  
と、食器棚の扉を開けカツプを2つ取り出した。

海崎「報告書は今先やつと書き終えたから、大丈夫だよ♪、ありがとう長門♪」

長門「つふ、提督を支えるのも、また秘書艦としての務めだからな、気にするな、それより、紅茶入れたぞ、飲むか？」

海崎「ああ、頂くよ♪」

提督の分の紅茶を執務机の上に置き、ソファーに腰を下ろした。

海崎「提督を支える、か、長門はいいお嫁さんになりそうだな♪」

長門「ぶふつ、あ、あはは、て、提督も冗談が上手くなつたものだな、」

紅茶を吹き出した長門は、頬を赤らながら、机を拭きはじめた。

海崎「冗談ではないよ、私は、長門には凄く感謝しているんだ、元々ヘリコプターのパイロットで、艦隊運用の知識なんてなかつた私の傍で、色々教えてくれて、執務中の私の身の回りのお世話をしてくれた、これを感謝せずして何を感謝するのか、ありがとう、長門」

長門「秘書艦として、当然な事をしたまで、感謝される事でもないさ、で、では、私は少し、見回りに行つてくる、提督もあまり夜更かしはしないような、」

そう言うと、長門は紅茶を飲み干し、洗い場に出すとそそくさと部屋を出て行つた。

部屋を後にした長門は、提督室から少し離れた所にある資料室に入ると、

激しく鼓動する胸を押さえた。

長門「提督は、私に、そのような思いを、うつ、つぶ、あはははは!!これは夢だろうか、いや、そうに決まつていてはいかが、なんという現実味のある夢なのだ！、あははははは!!」

渾身の力を込めて、笑い始めた。

それは、勝ち誇つたり、気分が高揚した時のような笑いではなく、信じる事のできない、現実に戸惑つた挙句、抑えきれない感情を紛らわせる

そんな笑いであった。

――――――第1話 完――――――

各話短編で、書いていこうと思ひます。  
是非是非、評価お願い致します。

# イージス艦が流行です！

時刻は、午後8時

夕食を終え、各自自由時間となるこの時間

艦娘達は、一つの楽しみの為に、大広間に集まっていた。

その集まる理由とは、今まさに、呉鎮守府では、海上自衛隊のイージス護衛艦、ブーム到来の

真っ只中であり、イージス艦に関する映画であつたり、自衛隊を取り上げた特集DVDの上映会が定期的に行われるのである。

その背景には、自分たちの名前が使われている事が大きい。

そして、映画を見終えると、各自いつものメンバーと、映画に関する感想や、イージス艦の魅力について

談笑したりと艦娘達の、癒しの時間となつていて。

そんな中、重巡洋艦摩耶（改二）は、映画のパッケージに載つてゐるイージス護衛艦をじつと見つめ、

目を輝かせていた。

時雨「ん？：摩耶どうしたんだい？」

鼻歌まで歌いだした摩耶に、白露型駆逐艦2番艦の時雨（改二）は声をかけた。

摩耶「あ？：いやあ～やつぱイージス艦かつこいいつて思つてな♪、あたしも、

最近イージス護衛艦になつたんだぜ♪、まだ、艦装中だけどな♪、どうだ？凄いだろう♪」

摩耶は、満面な笑みを浮かべた。

当たり前だが、あくまでも、イージス護衛艦まやとして、復活したのは事実だが、

ここにいる摩耶本人ではないというのは言うまでもない、そう、摩耶にとつては、

名前が使われた事に、大きな喜びを感じているのだ。

それも、流行真っ只中であるため、なおさらだ。

時雨「あはは汗、でも、それは凄いよね、金剛たちや愛宕たちに続

いて摩耶も、イージス艦に、  
きつと強い艦になるよ♪」

摩耶「そう思うだろう？、ああ～、あたしの艦装も、イージス艦  
してくれねえかな♪」

時雨「そ、それは、どうなんだろうね汗、」

摩耶の言葉に時雨は思わず苦笑いを浮かべた。

時雨「うーん、でも、そういう事なら、夕張にお願いしてみたらどう？」

鎮守府の物づくり屋と言われる軽巡洋艦夕張に依頼するという案など頭になかった、

摩耶は、盲点だったと言わんばかりな表情を浮かべた。

摩耶「そうか！その手があんじやん♪、よし、そうとなつたら、時雨いくぞ！抜錨だ！」

時雨「え？、ええええ汗」

時雨の右手を掴み工廠に向けて摩耶は走り出した。

—————工廠—————

夕張「え？、摩耶にイージス艦艦装を作つてほしい？」

摩耶からの突然の依頼に、目を丸くした夕張は、少し考え込むように、頭を搔いた。

いくら物づくり屋とは言つても限界があるのも当たり前だ。

だが、物づくりが好きな夕張にとって、できないと言うのも、プライドが許さなかつた。

摩耶「ああ、なんとかなんねえか？」

夕張「うーん、イージス艦の艦装を作るとは言つても、あのイージスシステムは、普通の電探とは全く違うし、主砲も1門、その他対艦、対空、迎撃用ミサイルに武装の変更もしないと適応できるか分からないし開発も難しいかも知れない、でもまあ、やってみるわ、楽しそうだし♪」

夕張は、溶接用のお面を手に持つと、設計図を作り始めた。  
作つては確かめ、気に入らなければ破棄し、また作つていく。

そんな夕張の姿を、摩耶と時雨は呆然と見つめていた。

時雨「でも、提督に一言添えなくて良かつたの？」

時雨は、首を傾げ、不安げに言つた。

摩耶「心配いらねえよ、後で何とでも言つて、納得させればいいし♪」

摩耶は、そう言うが、時雨の不安が解消される訳もなく苦笑いを浮かべ、

夕張を見つめた。

夕張は、ようやく納得のいく設計図ができたらしく、いよいよ開発に取り掛かっていた。

薄暗い工廠内に、溶接の火花が散り、金属を叩く甲高い打撃音が鳴り響いた。

翌日

時刻は午前9時を回つた頃。

摩耶と時雨は、提督に話夕張が来るのを待つていた。

海崎「摩耶、本当に扱えるのか？、イージス艦艦装つて汗、」

海崎は、期待というより、不安ばかりを抱いていた。

強くなる事に対し不安を抱いている訳ではない、重巡洋艦からいきなりイージス艦への転生という事になる訳で

本当に扱えるかどうか、海上自衛官である海崎にとつては、不安要素満載だつたのだ。

摩耶「ああ♪、大丈夫大丈夫♪、今のあたしには、しつかりと扱えて強く戦える未来しか見えないよ♪」

時雨「なんだか、そのセリフを聞くと余計不安になるね汗」

時雨と海崎は、同意見だつた。

さて、そうこうしている内に目の下に隈の出来た夕張が、完成したイージス艦まやの艦装を牽引し、提督室に入つてきた。

海崎「ゆ、夕張、大丈夫か？汗」

夕張「は、はい、なんとか、想像以上にいい艦装が出来たわ、」

とりあえず、私は寝る、」

夕張は、朽ち果てそうな声で、言うとソファーに倒れ込み眠つてしまつた。

海崎「相当徹夜で頑張ったんだな汗、、」

海崎は、やれやれと嘆息の息を吐きながらも、上着を寝ている夕張の上に被せた。

やつと、念願だつたイージス艦の艦装を入手した摩耶は、早速装着しようとしていた。

摩耶「いやあ、ついにこの時が♪、さあ、行くぞ！抜錨だ！」普段と同じように艦装を装着した。

すると、いきなり艦装から部屋全体を飲み込むような強力な光が溢れ出てきた。

海崎「目が、目があ!?、」  
時雨「つう、!?」

閃光弾でも喰らつたかのような、痛みが海崎や時雨を襲つた。痛みや眩しさから開放されると、目の前の光景に、言葉を失つた。

摩耶「つへ？、」

さつきの閃光で状況を読み込めていないようだが、イージス艦の艦装を装着した摩耶は

下着姿になつており、その上艦装を装着していた。

また、摩耶が着用していた下着というのが大人なパンツ、、ではなく、可愛らしい熊の、

顔が描かれたパンツで、そのギャップに海崎や、時雨はただ呆然と見つめるしかできなかつた。

摩耶「、つは！、ち、ちが、これは、と、とととにかく、見んじや、ねえ!!、」

やつと状況を理解した摩耶は、咄嗟にしゃがみパンツを両手で隠した。

が時はすでに遅し、海崎、時雨は暖かい目で見つめていた。

摩耶「どうなつてんだよ、くそが！」

摩耶は、顔を、真つ赤にし、夕張が作つていた説明書を読むと、そこには、

艦装のデザインが、詳細に書かれており、服が消失する旨記載されていた。

つまり、設計上艦装を装着すれば、服は消失し、下着が露になる事は正常だという事だ。

後日、夕張はその件に対し、個人的興味と供述している。

さて、海崎の目の前でそんな醜態を曝け出してしまった摩耶は、1週間海崎に呼ばれようと、顔を出す事もなく、イージス艦になりたい願望もさっぱり消えてしまった。

摩耶「イージス艦になるのはこりごり汗イージス艦は見るに限るな、」

第2話終わり

――――――――――――――――――――――――――――――――――

ご視聴ありがとうございます。

ご感想、ご意見、評価をお願い致します。

それでは、次回の話でお会いしましょう！

## 呉鎮守府釣り大会！開幕？

時刻は、午後2時

季節は夏に入り、猛暑日が続中

呉鎮守府に所属する金剛型4姉妹が、自室で日課であるティータイムを楽しんでいた。

紅茶と茶菓子を堪能しながら、提督愛を語つたり、食べ物の話題を話し合つたりと、

自由な一時を優雅に過ごしている。

金剛「最近提督が冷たいデース、、、公務も忙しそうだし、、、」

金剛は、紅茶を飲み干すと机に額を付け嘆いていた。

提督である海崎は、こここの所資料の制作や、防衛省での、各鎮守府提督会議に参加したりと

多忙な提督業務をこなしており金剛との、スキンシップも取れるほど余裕がなかつた。

金剛「あのままじゃあ、、提督の体が壊れちゃうネ、、どうにか、、リラックスタイプ出来るいい案があればいいんだけど、、、」

金剛は、下あごを摩り考え込んだ。

霧島「何か、提督が皆と楽しく出来るイベントがあると、ストレスとかも解消されるかもしだせんね」

妹である4番艦霧島は、そう提案するとテレビをつけた。  
テレビが付くと、ちょうど釣り番組が映り、和歌山県で行われている釣り大会の特集をしていた。

そんな番組を、金剛は呆然と見つめ、思考を巡らせた。

榛名「これ、、、これ使えませんか？金剛姉様！」

同じく妹である3番艦榛名はテレビ画面を指差した。

霧島「釣り、、、ですか？」

霧島は、少々理解出来ないと聞いた気な表情を浮かべ首を傾げた。

最初は、キヨトンとした表情を見せた金剛だったが、テレビに映るタレントの楽しそうな所見てか  
すぐに、テレビに釘付けになつた。

金剛「まさに、これデース!!、榛名よくやつたネ、さあ、そうとなれば、じつとはしてられないデース!!早速準備するネー！」

金剛は、そう言うと榛名と霧島の手を引き足早に部屋を出て行つた。

比叡「、、つは！、、金剛姉さまーー!!比叡の手も引いてくださいよー!!」

2番艦である比叡は、慌てて金剛達の後を追いかけた。

部屋を飛び出した金剛達が向かつたのは港だつた。

釣り大会で使う、会場を設置するための場所を選ぶために、広さや、港との距離を見ていく。

そして、場所が決まれば、テントを設置していくのである。

金剛「テントの設置はこんなものネ」

テントや、大型のビニールプールを用意し終えた金剛達は手を払い立ち上がつた。

霧島「よし、では私は、色々道具を準備してきますね！」

榛名「あ、でしたら私もお手伝いします！」

霧島と榛名は、鎮守府に戻つていつた。

金剛「お願いするネ！、ふつふつふ、いよいよネ♪」

金剛は、意味深な笑みを浮かべ、海を眺めた。

その頃提督室では

海崎と長門が、ニュースを見ながら、資料を作つていた。

深海棲艦の活動も最近少なく、周囲警戒を行い資源確保のための遠征、演習を行う事が多くなつていたが。

提督である海崎だけは、防衛省に呼び出され、地方総監での会議に参加したり、また鎮守府にいたとしても、資料を纏め、部隊運用における公務をしたりと多忙を極めていた。

天気予報士「非常に強い台風13号は、今も勢力を保つたまま、太平洋を北上しており、

遅くとも明日には、四国に最も接近すると思われ警戒が必要です。」  
海崎「台風か、、四国に来たところで、どつちに針路を変えるかだな、」

海崎は、テレビを横目に資料を作っていく。

長門「そうだな、艦隊の子達には、屋内待機を徹底させよう。」

そう言うと明日の予定を外し始めた。

翌日――――――

四国を縦断した台風13号は、招待されたかのように、広島県に上陸した。

無論呉市は、大雨、暴風に見舞われた。

海は荒れ、テントは吹き飛ばないようにと、艦隊の子達で畳み、屋内で退避する。

霧島「金剛姉さま！、急いでください！もつと強くなるそうです！」

雨降る港に立ちすくむ金剛を大声で呼んだ。

金剛は、悔しそうな表情を浮かべ空を見上げた。

金剛「、せつかく、この釣り大会で、提督のストレスを発散させて、

あわよくば、大物釣つて、提督のハートを驚撃む計画だつたのに、、、  
うう、許すまじ台風デース！！」

こうして釣り大会は、開催される事なく終わつたのである。

第3話終わり

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

第3話の御閲覧ありがとうございます！

是非是非、ご評価、ご感想よろしくお願ひします。

(勉強になります♪)

では、次回のお話を楽しみに♪

# 珍！・コンテナ船救出作戦です！

時刻は午前10時を回った頃。

小雨が降る瀬戸内海は、霧に覆われていた。

通過する商業船が、薄つすら見えるが、ほとんど視界が遮られる状態で

ほとんどの船は、出航を控えており、沖合いを進む船はほとんどいなかつた。

そんな中霧深い瀬戸内海を1隻の中型貨物船が航行していた。

日本国籍の貨物船「しれとこ丸」は、シンガポールで食料品を積み、大阪へ運搬中であった。

船長である大口澄夫（おおぐちすみお）42歳は真っ白な視界に目を凝らし周囲の

状況を把握していく。

大口「：、両舷20：、面舵15：、ヨーソロー：、全く視界が悪いんじやあ、大阪の到着も遅れそうだな」

大口は腕時計に目をやつた。

霧による視界不良の影響により、当初の通過予定時刻が過ぎており、大口の顔から余裕の表情は微塵もなかつた。  
遅れた時間を取り戻したい気持ちが強くなり、焦りばかりが積もつていく。

そしてそんな状態の中、船体が大きく揺れた。

前を見ると、大きな波しぶきが上がり、その中に船が突つ込み、大量の海水を被つていたのだ。

周囲の海面は、穏やかにも関わらず、起きた大きな波に大口は困惑を隠せなかつた。

大口「なんだ、今のは？、：、ん？」

ふつと船首の方に目を向けると、人の姿があつた。

霧のせいで、表情までは見えないが、その姿からして、女性だろうか、

船首ですっと佇んでいた。

航海長「船首に人？、」

大口「いや、、人じやない、、本船に女性の乗組員は居ないし、、海面から船首まで登れる訳がない、」

大口の、言葉に航海長は何かを察したかのような表情を浮かべ、再びその人影を注視する。

大口「あれは、、深海棲艦で間違いない、、、今のうちに救助要請を出しておけ、」

航海長「了解」

船員「船長、、、」

船員の恐怖に怯えた声で呼ばれた瞬間背後から、副砲を突きつけられた。

恐る恐る背後を振り向くと、そこには、白色の長い髪を漂わせ、青い瞳でこちらを睨み副砲を向ける

戦艦タ級の姿があつた。

タ級「、、コノ船ハ、、乗ツ取ツタ、、殺サレタクナケレバ、私達ノ指示通りニ船ヲ動カセ、、、」

大口「わ、分かつた、、その代り、絶対クルーには、危害を加えないでくれ」

大口は両手を挙げ、指示に従う意志を示した。

タ級「、、約束シヨウ、、ダガ、従ワナケレバ殺ス、、ソレト、コノ船ノ積荷ハ？」

タ級は、何かを期待しているのだろうか、瞳を輝かせていた。

大口「し、、シンガポールの、お菓子類です、、」

タ級「、、オカシダト、、右ヘ一杯舵ヲトレ、、」

積荷を知ったタ級は、興奮気味に大口に指示を出した。

船橋にいた他の深海棲艦も、声こそ出さないが、お互いの顔を見合

い  
喜びを分かち合っていた。

大口「は、、はい、、面舵いつぱい！」

大口の号令で、「しれとこ丸」の船体が大きく傾き右へと針路を変え、霧へと消えていった。

「しれとこ丸」で起きた事件は、すぐさま呉鎮守府に伝えられた。  
そして、提督室に大淀が招集された。

大淀「発生日時本日午前10時30分頃、発生状況としては、日本国籍のコンテナ船しれとこ丸が瀬戸内海上を航行中複数の深海棲艦にジャックされ、行方が分からなくなつた模様、現在空自のRF4偵察機が、現場海域周辺を偵察中です」

海崎「そうか、報告ありがとう、深海棲艦によるジャックともなれば、人質にどのような危害を加えるか想像すらできない、早急な救出が求められるだろう、あらゆる事態を想定した、作戦を検討するぞ」  
海崎は、そういうと「しれとこ丸」が消息を絶つた海域の海図を広げた。

そこに、数枚の写真を抱えた長門が入ってきた。  
長門「航空自衛隊RF4偵察機がしれとこ丸を発見したぞ！、偵察写真も届いた。」

机に航空写真が並べられた。

その写真に写るしれとこ丸の状態に海崎も、大淀も目を疑つた。  
写真には、一つの島が写つており、その砂浜に「しれとこ丸」は乗り上げていたのである。

海崎「これは、どこの島だ？」

大淀「島の形状から、江ヶ島かと思われます。江田島の東側にある無人島ですね」

海崎「そうか、しかし厄介だな、見た感じ目的は身代金ではなく、積荷、積荷の略奪が目的だろう、要するに、これは海賊対処か、よし、速やかに救出作戦を開始するぞ、作戦に際しては、船内へ入り、人質を保護する第1艦隊及び、阻止するため攻撃を仕掛けてくるであろう、敵艦隊から第1艦隊を護衛する第2艦隊を編成し、救出作戦を開ける、長門すまないが、各艦隊の編成を頼む、編成完了次第出撃だ」

長門「了解した」

長門は、編成を行うため部屋を後にした。

事件発生から1時間経過

救助作戦に参加する艦娘達が続々と集まってきた。

長門の選出により選ばれた艦は総勢12隻は、整列し現場における総指揮を執る第2艦隊旗艦戦艦日向の作戦説明を聞いていた。

神通「皆さん、遅れないようについてきてくださいね！」

作戦説明を聞き終え、救助部隊である、第1艦隊の旗艦を命じられた軽巡洋艦神通は、後ろを振り向き艦隊メンバーの様子を伺つた。

そして、編成を完了した艦隊から順次出撃していった。

長門「提督、此度の作戦の編成内容を持つてきましたぞ、目を通しておいてくれ」

長門は、そう言うと2枚の資料を机に置いた。

第1艦隊は神通改二以下天龍、秋月、皐月、霞、朝潮の軽巡2隻と4隻の駆逐艦で編成されていた。

救助を行う第1艦隊を護衛する第2艦隊は日向以下伊勢、利根、筑摩、瑞鶴、翔鶴の戦艦2隻と重巡2隻、空母2隻で編成されており、海崎はその資料を見つめると窓の外へと目を向けた。

海崎「頼むぞ、」

その頃出撃した第1、第2艦隊は「しれどこ丸」が座礁している島に近づきつつあつた。

次第に大きくなつていく島に、ぐつと氣を引き締めた時天龍が声を上げた。

天龍「敵艦隊発見！、3時方向こちらにまつすぐ近づいてくるぜ！」

天龍からの報告を聞いた神通は咄嗟に周囲を見回すと言われた通りの方向から

深海棲艦たちが、陣形を作りこちら側に向かつていていた。

重巡リ級を先頭に、軽巡ツ級、そして駆逐イ級で編成された艦隊で、明らかこちら側の存在を知つていてるような様子だつた。

日向「私たちの出番だな、神通達は上陸に専念しろ、敵艦隊は、私たち第2艦隊が引き受ける！」

第2艦隊は、第1艦隊の列から離れ、敵艦隊へと向かつていつた。

その動きに気づいた敵艦隊は、主砲を向け戦闘体制をとつていた。

日向「第1艦隊を援護するぞ！、各艦、撃ち方はじめ！」

日向の号令を合図に、第2艦隊の艦娘たちが砲撃を開始した。

リ級「、ツク!、各艦撃テ！」

日向の放った砲弾を顔面に喰らつたり級は、片手で傷口を押さえつつ主砲を撃ち返す。

見た目とおりの撃ち合いとなり、海が白波を立て、水柱が上がった。そんな中神通達は、島に上陸し「しれとこ丸」が打ちげられている砂浜へと向かつて行つた。

砂浜に打ち上げられた「しれとこ丸」の周囲には、空のコンテナが、重なり合うように、

散らばつており、その間に人一人分ほどの隙間が空いて、まるでコンテナの森のようだつた。

神通「それにして、石油タンカーを襲うのではなく、民間のコンテナ船を襲うなんて不思議な事ね、一体積荷は何なのかしら、」

神通は、コンテナに手を当て、足元を見ながら歩いていった。

そして、コンテナの森を抜け、天龍の足が止まつた。

秋月「天龍さん？、どうかしましたか？」

天龍の後ろを歩いていた秋月型駆逐艦1番艦秋月が後ろから覗き込み、不思議そうな表情を浮かべた。

そんな天龍は、耳に手をあて、黙つて何かを聞いている様子だつた。

皐月「入電じゃないかな？」

天龍「そうか、、、神通、第2艦隊の日向から入電だ、、、戦闘終結、、我方艦隊被害甚大二ツキ、即時現場海域ヲ離脱スル、尚敵警戒部隊ハ壊滅、以後貴隊ノ武運ヲ祈ル」らしいぜ、」

神通「了解しました、、、さて、どこから船に入るか、、、よね」

目の前に聳える、座礁した「しれとこ丸」の船首を見上げた。

ざつと、ビル5～6階分はあるだろうか、到底登れるような高さじやなかつた。

天龍「海側からも行けなさそうだし、、、穴開けるか？」

皐月「いや、その必要はなさそうだよ、、ほら、これを見てよ」

「しれとこ丸」の左舷側から、木々が生い茂げる森林部に向けて複数の足跡が続いていた。

森林部とはいえ、深海棲艦が、人質を連れて身を隠せれるとは思えない。

それこそ、島内に洞窟でもない限りは、隠れる事は難しいだろう。神通「とにかく、足跡を辿つてみましよう。」この先にいる事は間違いないわ」

神通は、そういうと足早に森林の中に入つていった。

霞「艦娘だというのに、山の中で活動だなんて、どこの鎮守府行つても、ここだけよ」

文句を吐きつつも、隊列に遅れないように、後をついていく。

森林に入り、5～60メートル程行つた所で、岩肌が露出した箇所にたどり着いた。

そしてその先は、岩の壁があり、ちょうど目の前に、大きな洞窟があつた。

秋月「こ、ここ入るんですか？、わ、私たち灯りとか、何も持つてませんけど、」

洞窟の中は、真っ暗で奥がどうなつてゐるのか、全く見えなかつた。その暗闇に、秋月をはじめ、天龍たちも若干入るのを躊躇つていた。神通「ええ、敵が隠れるとすれば、この洞窟が一番有力だと思うので、

それに、灯りでしたら、私の探照灯があるから心配いりませんよ、皆さんは絶対私の後を離れず着いてきてくださいね」

神通はそう言うと探照灯で中を照らし、中に入つていった。

洞窟の中は、ひんやりとしていて、天井から水滴が落ちる音と、自分たちの足音以外何も音がしなかつた。

皐月「、何か出てきそうで怖いよ、ひやう!?」

天井から落ちてきた水滴が、頭に当たつた皐月は、思わず声を出しつしまつた。

秋月「皐月さん大丈夫ですか？」

皐月「う、うん、大丈夫だよ、水滴が当たつただけ、」

神通「大丈夫ですか？、逸れないよう、前の人背中についてくださいね」

神通は、探照灯で前を照らしつつ、前へと進んでいく。

そして、洞窟に入つて1時間ほど歩いた所で、奥のほうから、冷たい風が吹き、

その風に混じつて、磯の香りが漂ってきた。

神通 「この香り、」

天龍 「海の匂いだな、」

神通 「この先ね！、、皆さん！行きますよ！」

神通は、小走りで匂いを辿り進んで行つた。

そして、しばらく前に進むと、入り口らしい場所に着いた。

入り口には、明らか人工的に置かれた板があり、隙間から外の明かりが漏れていた。

神通 「ここね、皆さん配置に」

入り口を挟むような配置に着き突入の準備についた。

その頃、

洞窟の中から、神通達が突入する準備を進めている事を知らないタ級達は、

ロープで縛つた大口達の前で、積荷のチョコ菓子を食べ合い、人間の嗜好を楽しんでいた。

その中心には、黒いワンピースを身に纏つた戦艦棲姫が鎮座していた。

戦艦棲姫「コレガ、、人間ノ作り出ス物ワ面白イワネ♪

口の周りがチョコ塗れになつた戦艦棲姫は、無邪気に微笑みチョコの味を堪能している。

その周囲で、タ級達も同じように口の周りをチョコ塗れにしていた。

タ級「コノ、、間抜ケナライオンノチョコハ、、中々絶品ダナ！、、旨イ！」

マーライオンの姿を模したチョコレートを一口、また一口と口に運ぶタ級は、満足と言わんばかりに

頬を押さえ、幸せ溢れる笑顔を浮かべる。

そして、呆然と見つめる大口達に視線を向けた。

大口「、あいつらの目的って、人間の食べ物を強奪する事だつたのだろうか、燃料とかの資源ではなく、」

自分が想像していた深海棲艦とは全く違う姿に拍子抜けした大口は、チョコ菓子を貪るタ級達をただ見つめていた。

そんな時だつた、神通の「突入！」との号令を合図に木の板が蹴り倒され、神通たちがなだれ込んで来た。

神通「動かないでください!!」

突入してきた神通達は、チョコ菓子を咥えて固まっている戦艦棲姫達に主砲を向けた。

天龍「動いたりしたら、ドカーン！と吹き飛ばすーー、ぜ？、つて、お前ら何してんだ？」

突入したはいいものの、あまりに拍子抜けすぎて主砲をゆっくりと下ろした。

自分たちは、民間のコンテナ船が深海棲艦にジャックされて、救助のため、航空自衛隊すら偵察機を上げて、救出作戦に赴いてきたが、いざ来てみれば、深海棲艦が人質に砲口を向けて脅してくる訳でもなく、条件を提示してくるでもなく、積荷のお菓子をただ食べてお互いでシェアしているだけという状況に、

心の底から込み上げてくるモヤモヤとした感情が神通達のオーラとして吹き出てきた。

タ級「オ、、オマエ達、、ドウヤツテココヲ!?、、」

戦艦棲姫「カ、、カエリ、、ナサイ?、、、ジャ、、ジャナイト、、人質殺スワヨ?」

神通達の黒いモヤモヤを纏つたオーラを感じたのだろうか、戦艦棲姫達の声はどこか震えて

怯えていた。

神通「制圧開始!!」

天龍達「おーーー!!」

その後の事は言うまでも、「それとこ丸」を襲撃したタ級と戦艦棲姫

は、大破させた末、確保連行された。

大口達は、無事に救出され駆けつけた海上自衛隊のヘリコプター搭載護衛艦「かが」に乗り、大阪港へと送られたのだつた。

後の呉鎮守府の調べに対し、戦艦棲姫は、自らが民間コンテナ船襲撃の黒幕である事を自供し、

タ級達と共に、呉鎮守府で監禁する事となつた。

神通「なんだか、いつもの作戦の時とは違う疲れ方してしまいましたね、」

作戦を終えた神通は、補給のため、食堂に足を運んでいた。

天龍「全くだよな、なんだか、不完全燃焼つうか、なんつうか、はあ、」

秋月「あはは汗、、まさか深海棲艦が燃料じやなくて、積荷のお菓子を狙うというのは、

驚きましたけど、なんだか可愛らしくもあつたような、」

秋月は、そういうと笑みを浮かべ、お茶を啜つた。

霞「可愛らしい?、笑わせないでよね、例え、チヨコを食べる姿が愛おしくても、敵は、敵は敵なんだからね、」

そういう霞も、若干頬を赤らめているのは、その場にいる誰もが目視していた。

皐月「まあ、それはともかくさ、実はあの深海棲艦が食べてたチヨコレート食べてみようよ♪」

皐月は、ビニール袋に詰められたマーライオン型チヨコレートを取り出した。

霞「ちよつと、あんたまさか盗んできたの!?」

神通「泥棒は良くないですよ?」

皆が怪訝そうに皐月を見つめたが、そんな皐月は、堂々とした面持ちを浮かべた。

皐月「皆人聞き悪いなあもう、、あのコンテナ船の船長さんが、お礼について、くれたんだよ♪」

無邪気な笑みを浮かべる皐月に、皆「なるほど」と、怪訝そうな表

情から一変、

目を輝かせ、チヨコレートを見つめた。

神通 「そういう事なら、食べても問題ありませんね♪」

天龍 「そうだな♪、♪」

秋月 「早く食べてみましょよ♪」

霞 「仕方ないわね、、、食べてあげるわよ、、、」

皐月 「うん♪、、、、じゃあ、いただきまーす♪」

チヨコレートを口に入れるタイミングはほぼ同じだった。  
そしてーーー

神通達 「甘あああい♪」

神通達は作戦後の至福を満喫したのだつた。

第4話終わり

—————  
第4話のご閲覧ありがとうございます。

もしよろしければ、ご感想、ご評価をよろしくお願ひします。

(勉強になります)

ではまた、次回にお会いしましょう

## 江風の誕生日大作戦です

時刻は午前8時を回った頃

白露型駆逐艦9番艦江風は、陽気な雰囲気を出し鼻歌を歌いながら廊下を歩いていた。

その日江風の陽気な雰囲気は、他の駆逐艦達にも伝わり、口を揃えて「江風今日はいつも以上に機嫌がいいね！」や「江風さんなんだか、輝いているのです」と噂が口から口へと広まつていったのである。

何故江風が、そこまで上機嫌なのかと言えば、今日11月1日は江風の進水日であり、いわば誕生日なのである。

流石に、子供のように馬鹿はしやぎする事は出来ないが、それでも高揚する気持ちは、江風の心を水平線から顔を出す太陽のように明るく照らした。

海風「ふふ江風、今日はなんだか楽しそうね♪」  
姉である海風は、微笑みを浮かべそう言つた。

その言葉に、江風も満面の笑みで「そうかい？」と答え、海風の方に振り返つた。

江風「そりやあ、今日はあたしの特別な日だからねえ♪、海風の姉貴は分かるだろう？」

江風の問いに、一瞬クスッと笑つたが、天井を見回し足早に歩き始めた。

海風「ええ？、それはどうだつたかしらね♪」  
江風「おいおい汗、その冗談はきついよお汗」

苦笑いを浮かべ海風の後を追いかけた。

海風「さあ、冗談かどうかは分からぬわね♪、そんな事より、これから洗濯しにいきますよ

江風も自分の洗濯物あるなら籠に入れておきなさいよ？」

海風は、そう言うとそくさと自分の部屋へと戻つていった。  
最初は不満そうな表情を浮かべていた江風だつたが、海風の姉貴だけだろうと他を当たりに行つた。

まず、江風が向かつたのは、時雨たちの部屋であった。

江風「時雨の姉貴たちなら、覚えてくれてるよな」

不安はあるものの、自分に言い聞かし勢い良くドアを開けた。開かれたドアの向こうには、ピンクの多い部屋が広がっており、その中央に置かれた机を挟んで

時雨と夕立がいた。

二人は、紅茶を入れてお菓子を嗜んでいる最中であつた。

時雨（改二）「江風じやないか、どうしたんだい？」

クツキーを咥えたまま江風のほうに振り返った。

夕立はクツキーを頬張りリスのように両頬を膨らませ江風の方を向く。

江風「ちよつとね、確かめたい事と言うか、聞きたい事があつてさ、まあとりあえず、クツキーを一つ」

手を伸ばし机の上に置かれたお皿からクツキーを摘むとヒヨイッと口の中に放り込んだ。

そして、甘い味を堪能しながら噛み碎き飲み込んだ。

夕立「ヒヤツテたゞえるひよ、ヴおぎようぎいヴありゆいびよい！」

翻訳（立つて食べるの、お行儀悪いっぽい！）

夕立は口いっぱいに頬張ったクツキーが、零れないように口を両手で押さえながら言葉を発していたが、

解読できるわけもなく、江風は首を傾げた。

江風「夕立の姉貴何言つてるか分からぬよ汗」

時雨「ああは汗、それより江風僕たちに、聞きたい事つて？」

紅茶を飲み、口の中のクツキーを流し込む夕立を尻目に時雨は、江風を見つめた。

江風「あ、そうだつた、時雨の姉貴らは今日何の日か知つてる？」

江風は、満面の笑みを浮かべながら時雨たちに聞いた。

その問いに一瞬戸惑つたような表情を浮かべたが、笑みを浮かべ首を横に振つた。

時雨「うーん、僕たちは分からぬ汗、夕立は何か知つているかい？」

夕立「ゆ、夕立も知らないっぽい汗」

時雨に振られた夕立も、クツキーを食いついたまま首を横に振る。そんな時雨たちに江風も驚きを隠せなかつたが、「またまた♪」と本音を聞きだそうとした。

時雨「あはは汗、本当に知らないんだ汗♪こめんね」

江風「そ、そなんだ♪、ま、まあ知らないなら仕方ないよね、♪、

あはは汗」

苦笑いを浮かべながら、クツキーをもう一つ摘み部屋を出た。

時雨たちが知らなかつたという事に、少しショックを受けた江風だつたが、

偶然と自分に言い聞かせ、別の子達の部屋に向かつた。

——提督室

江風が、艦娘の部屋を訪ねては、自分の特別日を言い当てる子を探し回つている頃。

提督室では、海崎と海風が江風の誕生日でのイベントに関して話し合われていた。

料理を考え、会場つくりの状況を把握した後修正案を出したりと、着々と準備が進められている。

海崎「とりあえず、料理はこんなものでいいと思う、」

海崎は、間宮から送られてきたメニュー表に目を通しながら一つ一つ確認していく。

海風「はい♪、ケーキも間宮さんに手配していたものが、既に食堂に準備されてますよ♪」

海崎「ああ、ありがとう♪、よし予定時刻には間に合いそうだ♪、江風にはまだ、パーティーの

事は話してないよな？」

海風「はい！もちろんですよ♪、江風以外の全艦に極秘を徹底させています♪」

海崎「よし♪、じゃあそろそろ我々も移動しようか、」

海崎は、そういうと立ち上がり正帽を被つた。

海風「では、私は江風を呼んできますね♪」

海風も、一礼し部屋を後にした。

その頃江風は、堤防に一人座り水平線を見つめていた。

時雨達の部屋を後にした江風は、駆逐艦寮や軽巡寮、戦艦寮でも聞いて回り、

聞いた全ての子達が、「知らない」と言い慌てた様子で江風から逃げられていた。

今日は、江風にとつて特別な日であり、皆が知つていて、祝つてくれるだろうと

思つていただけあつて、その事実はあまりにショックが大きかつた。

江風「はあ、皆何で知つてないんだよ、しかも何故か逃げられるし、」

まあ最近新しい奴がいっぱい來たし、あたしはお役ごめんなのかね汗

そう考えれば考えるほど、気持ちが落ち込んでいった。

それと同時に寂しさがこみ上げてきて、江風の目に大粒の涙が溢れ出てきた。

涙を流すなんて自分のキャラじゃないと思つていた江風は驚き涙を拭うが、

次から次へと溢れ出てきて収集がつかなくなつていた。

そんな所に、江風を探しに来た海風が走ってきた。

海風「あ、居た居た♪江風ー！」、つて、江風どうしたの!?なんで泣いてるの!？」

あまりにも光景に驚いた海風は、江風の隣に座り、顔を見つめる。

江風「泣いてないけどさ、拭つても出てくんだよ、泣」

海風「それは泣いてるのよ、ほら、私に言つてくれないと、分からぬいわよ？」

海風は、泣いている江風を慰めながら優しい口調で問いかける。

江風「、今日は江風の誕生日なのに、誰に聞いても知らない、知らないって言うんだよ、」

それに最近新しい奴もたくさん来てさ、あたしはお役ごめんなの

かつて思つたら、寂しくなつちまつてよ、」

自分でも、自分のキャラに合わないなと思つた江風だが、高まつた感情を上手く制御できず、

そのまま思つたことを吐いた。

それを聞いた海風も、罪悪感を感じたのか、顔を引きつらせたが、顔を横に振り、

笑みを浮かべると江風を抱きしめた。

海風「なんだそんな事で泣いてたのね、大丈夫よ江風、私も提督も、艦隊の皆さんも、ここ呉鎮守府に所属する皆さんが江風を要らないなんて思つた事ないわよ、だつて皆仲間でしょ♪だから大丈夫」江風の頭を撫で、強く抱きしめたままそう言つた。

その優しい言葉が心に来たのだろう、江風は、ついに声を出して泣き始めてしまつた。

江風「海風の姉貴ー！泣、わああん」

海風「まつたくもう、今泣いちやつてどうするの？、ほら皆待つてるわ、行きましょ♪」

そう言うとゆつくり立ち上がり江風も立たせる。

江風「皆待つてるつて？」

海風「それは、行つてからのお楽しみよ」

江風を連れて食堂に向かつた。

———食堂

海風の手を握り、食堂の扉前にまで来た江風は目を擦り前を向いた。

海風「江風大丈夫？」

ドアノブを握つた海風は、開く前の確認にと江風を見つめる。

泣いた事に少し恥じらいを感じたのか顔は少し赤いが、いつもの江風に戻つているような気がした。

江風「ああ♪、あたしはいつでも大丈夫さ♪」

江風は、いつものように無邪気な笑みを浮かべてみせた。その笑みに、海風も安心して同じく笑みを浮かべた。

海風「じやあ行くわよ♪」

そして海風が食堂の扉を開け江風が1歩中に入つた途端大量のクラッカーが鳴らされ、紙ふぶきが舞つた。

皆「工風！お誕生日おめでとう！」

大量的のクラッカーが鳴らされ、紙ふぶきが舞つた。

呉鎮守府に所属する艦娘達による、サプライズに驚いた江風は、  
その場に立ち尽くしていた。

達也

おり、嬉しさと安心感を感じた江風の目にはまた涙が浮かび、満面の笑みを浮かべた。

海風江風、お誕生日おめでとう♪

こうして、無事工風の誕生

こうして無事江風の誕生日作戦は成功に終わったのである

かなり遅くなつたけど

11月1日江風の（進水日）

江風お誕生日おめでとう—————  
!!!!

卷之三

もしよろしければ、ご感想、ご評価をよろしくお願ひします。

(勉強になります)

ではまた、次回にお会いしましょう